

異物化する心と身体： アルフォンス・ドーデーの闘病記 『ドゥールー（痛み）』をめぐる

有 田 英 也

はじめに

アルフォンス・ドーデーは1840年に南仏ニームに生まれ、1897年にパリで没した。「スガンさんのやぎ」「アルルの女」などの短編、おおらかな南仏人を描いた小説『タラスコンのタルタラン』（1872）は、今日も親しまれている。いずれも南仏プロヴァンス地方を中心にコルシカ島、アルジェリアなど総じて南の風と、太陽と、住民の独特な気質を描いた。19世紀を代表する出版人エツツェルにより刊行された短編集『風車小屋だより』（1869）は、20代最後の年に発表されたドーデーの代表作である。

皮肉なことに、作家として円熟期を迎え、「問題小説」（roman à thèse）を次々と発表していた1880年代半ばに、ドーデーは健康を害し、毎年のように夏を鉱泉地で過ごさねばならなくなった¹⁾。

本論は、ドーデーの没後刊の闘病記『ドゥールー（痛み）』を取り上げて、そこに見られる心身の問題を吟味する。同様に没後刊の創作メモ『人生ノート』を参照しながら、自然主義作家の周辺に位置付けられがちなドーデーの個性について、ささやかな解明を試みる。

1 なぜ病が問題になるのか

ジャーナリストとしてのドーデーは、自己を舞台に載せ、誇張的な言動で観客を楽しませるタイプの作家だった。このことが、『風車小屋だより』巻頭「居を構える（Installation）」の初出を読むとよく分かる。

『レヴェヌマン』紙1866年8月18日号掲載の「風車小屋だより第1信」は、一人の病人の話で始まった。パリの文壇付き合いで精神の平衡を失い、批評家の巨大な頭部に押しつぶされる悪夢に悩まされた語り手が、知人の勧めで南の土地で療養しようと決意したからである。ところが、廃棄された風車小屋を買い取って住み着いて四か月、街に出て『レヴェヌマン』紙を手取るや、彼の「両手は感動で震えた」。執筆欲が疼いてたまらず、編集長に手紙を書いた、というのが連載開始の次第である²⁾。『風車小屋だより』冒頭で、小屋の先住者であるウサギに礼を尽くし、犬の言葉に耳を傾けようとする「詩人」とは、かなり演出が異なっている。ドーデーは彼の愛読者にとっての作者像が、パリにアンビヴァレントな愛憎感情を抱く南仏人であることを熟知していたが、そこに幅を持たせようとしたのである。

ドーデーが他者について物語る時も、見せ方はコミカルであったり、涙を誘ったり、あるいは異国情緒を求める読者の期待に応じて南仏人の心性 (mentalité) なりエトスなりを際立たせる案内者の手法であったりした。「アルルの女」を例に取れば、土地の人々が情念なり痛みなりに囚われて我を忘れ、他者との距離感も喪失して、大げさで奇矯な言動をするのを、あくまでも優しく繊細に描いた。このように社会的な作家性を有するドーデーが、みずからの痛みと病勢に向きあう時、どのような表現がもたらされるのだろうか。

もともとドーデーの自己に対する関心には特徴があった。短編で発揮された構成力と様々な語り口は、ジャーナリズムで書き続けて家族を養った職業作家の会得した技法だが、彼はまた天性の鋭敏な感覚を自負してもいた。『人生ノート』(1899)には、ニームの街路や鐘の音や店から放たれる匂いをすべて覚えている、と書かれており、「僕はなんて素晴らしい感覚機械 (machine à sentir) であったことか。とりわけ子供時代に」³⁾ という一節が目目を引く。ドーデーと同様に短編、いや掌編の名手と言われ、自然主義作家の辺縁に位置付けられるジュール・ルナールも、『博物誌』巻頭で自身を「イメージの狩人」と評している。だが、ドーデーの場合、感じやすさは脆さでもあり、このような記述が続いている。

「何冊も本が書けるほどの印象と感覚が、どれも夢の強度だなんて、

さしずめ僕は孔だらけで浸透しやすい運命だったのだろう。」
(p.129)

次に注目されるのは、ドーデーの病んだのが、患者への偏見の根深い社会的感染症だったことである。パリに來たって4年、ドーデーは前年に立法院議長モルニー公爵の第3秘書に採用されて創作に打ち込めるようになった矢先の1861年に咯血した。公爵の侍医に肺結核と診断されたドーデーはアルジェリア、次いでコルシカで転地療養した。これに反して、ドーデーはパリに來た直後、多くの芸術家を虜にしてきたマリー・リュウとの同棲時代に梅毒に感染していたとも言われ、現在ではこちらの説が有力である⁴⁾。感染の時期がいずれであるにせよ、少なくとも晩年の13年間のドーデーは、梅毒の進行による髄膜神経根脊髄炎の痛みを、モルヒネで和らげねばならなかった。

療養地はオーベルニュのネリ、次いで南仏ラングドックのラマルーの鉱泉地で、初めは家族と、その後は長男で医学生のリオンを伴った。両足の自由を徐々に失って松葉杖をつき、やがて友人の葬儀で記帳できないほど手も不自由になった。その闘病記と他の被治療者の観察記が、未亡人が30年以上も出版を許さなかった『ドゥールー（痛み）』（1931）である⁵⁾。

梅毒は19世紀フランスにおける代表的な性感染症である。アラン・コルバン編『感情の歴史』に「身体潰走：病と死に向かいあって」（第3部第15章）を寄稿したアンヌ・キャロルは、ドーデーの闘病記に言及している。彼が治療を受けている期間、梅毒は初期ならば水銀療法が可能だった。しかし、1880年代半ば以降のドーデーのように運動障害や記憶障害が顕著になると、抗生物質が用いられる1940年代まで、医師は積極治療を諦めて患者の望みに応じて鎮静剤を処方したとされる。前述のキャロルによれば、薬物依存が多発したためにモルヒネの薬としての信用が失われ、20世紀初頭になると医師が強い鎮痛剤を慎重に処方するようになった。1897年没のドーデーの場合、薬物は惜しみなく使われたと考えられる。そこには処方薬と違法薬物の使用が入り混じる点で、今日の依存症を思わせるものがある⁶⁾。

『痛み（ドゥールー）』には居所と名を秘した「X***氏」なる人物が3度登場する。最初は、その人の屋敷で過ごした「魅惑の三時間」

(p.60) についての記述である。鎮静剤プロミュールを処方されてからモルヒネを長いあいだ使っていなかったドーデーだが、「注射にはそれほど驚かなかった。体液が溢出して、いつも饒舌になったものだ。流れ出すような、ニガヨモギを混ぜたようなあの昼下がり」(p.60)と記している。次は、ドーデーと同様、人知れず脊髄を病んだX***氏が、近親者から「気で病んでいる」と嘲られていたことが語られる(p.82)。病名を公表できなかったのだろう。最後に、「もし私がモルヒネ礼賛を書くとしたら、***通りの屋敷を語るだろうに」と書き起こしたドーデーは、X***氏の訃報を病床で知り、届けられた形見分けの時計とプラヴァス注射器と砥石を受け取る。「行ってしまったのだな、旧友よ。私に注射してくれた仲間よ」(p.88)。

注射器を遺贈した男への友情が、自分の進行性の病に対する辛い自覚の源にあり、また依存への感受性の証左でもある。前述の引用で「孔だらけで浸透しやすい運命」つまり、自由意思と関わりなく、あたかも遺伝病であるかのように自分自身を多孔質で浸透可能と書くとき、ドーデーは多感なゆえに脆弱な自己と外界の皮膜を思ったはずである。情念が人を縛るように、苦痛は身体と心の境界を暴力的に踏み越える。

2 『ドゥールー (痛み)』のドーデー作品における位置づけ

闘病記の内容をさらに吟味する前に、病の自覚によって初期の短編集と作風が変わったのか、それとも変貌する自己の身体を対象として作風が深化したのか、まずそれを見極めねばなるまい。

たしかに、再度の咯血が認められたのは1878年で、梅毒の後遺症が運動障害に至って毎年のように鉱泉地で療養するようになったのは1880年代半ばのことである。だから『風車小屋だより』は健康を謳歌できたからこそ書けた青春の書と考えられなくもない⁷⁾。だが、伝記を参照すれば、『風車小屋だより』さえも病の下で書かれたことが分かる。

ドーデーは1861年暮れから翌年2月末までアルジェリア、次いでコルシカで転地療養した。表向きはモルニー公爵の命令による視察である。作家が病身であったため、現地をパリジャン視点で見下ろすのではなく、作品に奥行きが生まれ、運命に翻弄される人間たちへの共感が繊細な筆

致で語られる『風車小屋だより』に結実した。地方で起きた三面記事のような事件について、当事者たちのパトス（情念）に注目し、ペーソス（哀愁）を込めて語る筆致は、すでに初期短編集に明らかだった。だから、病による作風の変化か、それとも深化か、という問題は、『風車小屋だより』と『月曜物語』について新たな作品論が書かれれば解決されるだろう。

次は、はたして『ドゥールー（痛み）』が、ドーデーの初期著作と拮抗させる一つの独立した著作物と見なせるかどうかという問題である。これを言い換えれば、『ドゥールー（痛み）』は、1897年12月のドーデーの急死（心臓麻痺）によって未完に終わったものの、そうでなければ一つの著作物になりえた草稿ではないか、という主張である。ひとまずこれを作業仮説として、未完の著作物の内容と文体を、三つの観点から推測してみよう。

まず、小冊子『ドゥールー（痛み）』の70ページ足らずの記述は、療養地の記載から、おそらく1885年、著者45歳の年に書き起こされた。1896年7月に没した友人エドモン・ド・ゴンクール⁸の遺言への言及があるので（p.93）、ほぼドーデーの没年（1897）まで、13年間にわたって書き続けられた。途中、1890年から2年半ほど中断がある。後半の「痛みの国で」（pp.99-123）は、辛辣な人物評を含む療養所の観察記録であり、むしろ習作としての性格が強い⁸。

次に、この闘病記には処方された鎮痛剤の臭化カリウム、不眠症改善薬の抱水クロラル、解熱鎮痛剤アセトアニリドなどの分量と頻度が細かく記載されている。モルヒネは1880年代半ばから、前述のように名を秘した依存者から入手していた。

治療に当たったのは、リウマチと偽るのをやめて梅毒の後遺症だと告げたポタン医師と、ヒステリー研究で知られるシャルコーである⁹。後者はドーデーがサルペトリエール病院での講義を聴講して以来の友人だった。『ドゥールー（痛み）』には、「シャルコーと話す。おしゃべりを断られてずいぶんになる。ぞっとした。彼が私に言うであろうことを知る。〈死ぬまで君の面倒を見るよ〉」（p.71）とある。診断を聞いたドーデーは、これから起きることをすでに十分に予測していた。膜の隙間から侵入した外界の病原体におののく作家は、後日、「シャルコーと話しこむ。思った通り。一生こいつと付き合うのだ（J'en ai pour la vie.）。

待ち受けていたほどの衝撃はなかった」(p.74)と書いた。

これら二人の医師は、苦痛による睡眠不足と運動障害が顕著になるにつれて、積極治療を諦め、麻酔薬を処方した。鉱泉地のネリヤラマルーで、シャワーを浴びる水治療が行われ、患者は器械に吊られて背筋を伸ばされた。以上のことは『ドゥールー（痛み）』の叙述から知られる。同書には来るべき著作のための備忘録の側面がある。

最後に、闘病記には《Epigraphe : Dictante dolore.》(p.79)という謎めいたラテン語の句が読める。Librairie de France版(表紙に1930年刊とあるが国立図書館への法定納本は1931年2月20日)の扉には、プロヴァンス語の表題《La Doulou》の下にフランス語で《LA DOULEUR》(痛み)とあり、執筆年が「1887-1895」と記されている。ラテン語の銘はその下にある。試みに訳せば、「苦痛の命じるままに書く」となる。英訳に《Writing pain》とあり、仏訳に《Sous la dictée de la douleur》という例もある。さらに、後半の「痛みの国で」は、療養地のラマルー近辺を、あたかも河川の上流に発展した「神経症者の国」とみなして「高地ドゥールー」「低地ドゥールー」に区別し(pp.106-107)、湯治客と民宿経営者を観察する。このように「痛みの国で」には民族誌的記述の趣がある。

以上は『ドゥールー（痛み）』草稿説の根拠となりうるが、それは図らずも「作品」の手前に止まるという意味で未完説の証拠でもある。ここで注意すべきはドーデーの遺稿のうちで没後直ちに出版された『人生ノート』(1899)である。これは明らかに創作ノートであって、未亡人ジュリアの序文によれば、ドーデーは思いついた文章を記録しておき、自作に用いたら赤か青の鉛筆で消していた。『ドゥールー（痛み）』はどうか。たしかに、ここには『タラスコン港』(1890)に転用されて削られた一節がある(p.73)。だが、『ドゥールー（痛み）』が創作ノートだとしても、汎用性のある『人生ノート』とは別に保管されていた。そして、全集の出版に合わせた自著解題の『パリの30年』(1887)が、作品の成立過程を論じる際に眉唾ものであるのはドーデー研究者の常識なので、ドーデーが過去の自作になした介入はもちろん、これから書くものについての予断にも警戒が必要だろう。残念ながら、『ドゥールー（痛み）』のドーデー作品における位置づけは、今のところ決着がつかない。

そこで、本論では、病がドーデーの作家としての個性を深化させたのであれば、闘病記の内在的解釈によってそれを確認できるかどうかを検証する。注目するのは、異物化する心と身体という、本論の表題に掲げた主題である。

3 身体的自由の剝奪

ドーデーは根治したはずの梅毒が再発したために、初期著作に見られる感覚の記述と自己分析の手法を、みずからの変わりゆく身体と心を対象としていかに発揮する。

「まず、物音に対する傷つきやすさ。スコップ、暖炉脇の火ばさみなど。ものを引き裂くような呼び鈴。時計。朝の四時から始まる蜘蛛の巣の作業。

肌の知覚過敏、睡眠時間の減少、そして咯血。」(p.59)

「傷つきやすさ」を証拠立てる事物に「蜘蛛の巣」が並ぶのが奇妙だが、『ドゥルー (痛み)』には「否、蜘蛛が昼夜を分かたず、休みなく進む」(《(…) mais non, l'araignée va, va, nuit et jour, sans trêve.》p.73)とも書かれている。感覚中枢に巣食った過敏繊細の網が広がっている。

治療中は、「ガラスの鞘に収まり目盛りの入った気圧計に過ぎないと知る屈辱的瞬间」(p.68)というように、自身が計測器になぞらえられ、身体の反応が数値化されて、自律性の喪失を否応なく実感するだろう¹⁰⁾。

感覚器官が異化する一方で、ドーデーの詩人的感性も見られる。

「眠りなきモルヒネの夜の神々しい安らぎ。

庭の目覚め、ツグミの奴だ。鳥の歌が青白いガラスに嘴の先で描いた (ramagé) かのような、たどたどしい^{さえず}囀りと唐草模様。」(p.70)

モルヒネで痛みを抑えたドーデーは、朝になると庭の小鳥の囀りがあたたかもガラス窓を金属片で逆撫でするように響くのを聞く。嘴が文様を描くのも、囀るのも、幼児の発声も、同じ動詞《ramager》の語義である。詩的言語の常として、語の意味領域が感覚の領野を拡張する。読む

ように感じるのである。

鋭敏な感覚は体感にも向かう。運動機能を失いつつある身体を、重くて不自由な鎧と書く作家にとって、鎧は外敵から身体を守るために着装する器具ではなく、まだ動ける身体の部分を檻や柵のように閉じ込めている。

「〈鎧〉。それが私の第一印象だった。まず息苦しくてベッドで起き上がり、唾然とした。」(p.59)

「留め金を外せず呼吸もままならないこの鎧に捕えられてもう数か月。」(p.65)

ここで新しい体感にもとづいた身体表現に注目したい。ラマルーのケレル院 (Etablissement Keller) で施されていた脊椎の治療は、次のようなものだった。両腕にベルトを懸けて横木に取り付け、その横木の中央から上に伸ばしたロープを天井に固定した滑車に懸けて施療者が引くと、患者は宙に浮く。この横木には顎を固定して姿勢を正すためのロープも固定されている。こうして背筋を強制的に伸ばすわけである。「私は宙に4分間浮かんだままで、そのうちの2分間は顎でぶら下がっている。歯の痛み」(p.80)と、苦痛を伴う空中浮遊感を記す。その後、骨の動きを感じているかのような感覚表現が続く。

「私はうずくまり、伸びた髓が元の位置に戻るに連れて——そんな気がする——ゆっくりと起き上がらねばならない」(pp.80-81)

空中浮揚感は、例えばアンリ・ミショーなら作家自身が書いているようにメスカリンの幻覚だろうし、ボードレルの『人工樂園』にもアヘン服用の記述がある。だが、ドーデーは闘病中に鎮痛剤や催眠導入剤の効果で得た幻想を、コクトーの『阿片』のように積極的には書かない。それは薬物依存を隠したかったと言うより、痛みの経験そのものを創作の弾みにしたかったからだろう。ならば、痛みのない世界をフィクションとしてつくり出すのではなく、まさに痛みとともにある身体と、その身体を通して感知、想像される世界を構想して、読者に伝えることになる。

逆説的だが、弾みとは不調を意味したので、病勢の結果として起きる身体活動の不自由さと言葉の至らなさなどが、書かれるべき内容となる。闘病記の登場人物の身体が動かしづらいのはもちろんだが、語り手は痛みそのものの記述も、苦痛に苛まれる心理の描写も、手持ちの言葉では満足にできない。何より闘病記では、物語にオチをつけて逃げ場を見出せない。先ほど引用したケレール院の断章は、「いかなる治療効果も感じられない」(p.81)と、他人事のように結ばれている。初期作品の特徴である強い感受性は、運動障害によって変容を蒙りつつある身体に閉じ込められた心をむしろ苛むのである。

書くことをめぐって感じられる心身の背反は、初期作品にも読めるのだろうか。『風車小屋だより』の最終話「兵舎なつかし」では、兵隊時代の記憶に縛られた変わり者のゲーゲ・フランソワが、明け方に太鼓を叩いて風車小屋に来訪する。語り手は招かざる客に「夢を見るがいい」と内心で優しく語りかける。「私のパリも君のパリのようここまで私につきまとう。君は松の木の下で太鼓を叩き、私はここで書き物をする」からである¹¹⁾。『風車小屋だより』の語り手は、精神を病んだ人間や言葉の通じない動物など、共感しがたい存在の気持ちを思いやる。その筆致は自在で、情感にあふれていた。だが、過敏な神経を持ったまま傷ついているのが自分自身ならどうだろうか。

4 物語の窮状

『ドゥールー（痛み）』の語り手は、むしろ言語の至らなさを痛感して次のように書く。

「(情念と同様) 苦痛において真に感じられるもの全てに対して、言葉が何の役に立つというのだ。言葉は事後に、落ちついてから到着する。それは思い出しながら作り話をする能無しか嘘つきだ。」
(p.66)

この述懐には、「情念 (passion)」というあまりに文芸的で感情の科学的叙述になじまない語に導かれて、言葉による事実の語りの困難さに言い及ぼうとしているドーデーが見える¹²⁾。現実を言葉で模倣しようと

する当事者が情念という内的刺激に囚われていたら、はたしてうまく語れるだろうか。これと同様に、痛みを苦しんでいる状態を語ろうとしても、言葉は意識が苦痛から解放された「事後」の平安において初めて使用できるのではなからうか。つまり、語り手本人の苦痛を語る場合、語り手はお手上げになるか、語りを偽装して定型句を借用するかの選択肢しか残されていないのではないか。自分の痛みが、登場人物に投影され虚構化されるのではなく、まさに自分の意志と感情を縛る「鎧」となり、しかも親しい人間たちには痛んでいる身体が真っ先に見える。あるいは、前述の某氏のように「気で病んでいる」と陰口を叩かれるほど、他人の目を欺こうとする。これが『ドゥールー（痛み）』に読める心身の状態である。

この時、ドーデーが自在に操ってきたはずの言葉が失効する。とはいえ、ドーデーは言葉にできない痛みをユーモラスに書ける作家でもあったから、脊椎を矯正する器械に吊られて苦しむ姿を、「架刑の苦痛、手が、足が、膝が捻られ、神経が張り詰め、引っ張られて破裂しそうだ」(p.75)と書き、「辛い塩」のような鎮静剤プロミユールの味について書き足した後、自己を客観視してみせる。

「そして私は、イエスが二人の泥棒と痛みについて言葉を交わすところを想像していた。」(p.75)

言葉が事後に安んじて到来するには鎮静剤の助けが必要だったから、引用文は「嘘つき」と言うより露悪家の言葉である。没後刊の創作メモ集『人生ノート』には、「イエスが、同じく架刑に処せられていた二人の泥棒と痛みについて言葉を交わす」(p.155)と、ほぼ同じ表現が見出せる。このように、ドーデーは覚書の創作への転用を期していたが、聖書に由来する会話文は、まとまった記録文「痛みの国で」と同様、小説に組み込まれなかった。

物語作家の陥った窮状は、事実を物語るという模倣（ミメーシス）行為そのものの窮状にも通じる。ある男性が、嫉妬というありふれた感情を募らせて情念に囚われ、実際に歯痛や胃痛を感じながら経験を語りようとしているとしよう。情念（passion）も苦痛も、体験のうちでどれが、どこまで内的か外的かを判別しがたいので、この脳内の現実としか言い

ような嫉妬心について、しばしば意図的で反省的な言葉の操作が妨げられるだろう。ドーデーの治療経験も同様である。それをキリストの受難 (la Passion) になぞらえるとしても、言葉の連なりがどのような文学形式を模倣しているのか——警句か、戯曲か、歴史小説か——おそらく本人も決めかねている。

5 心の二重化

言葉に裏切られつつあるドーデーは、次の引用に見るように世界との調和的關係の終わりを意識する。

「隈なく幻視した世界の終わりが気にかかって一か月になるが、私の読んだところ、ボードレーは思考のできる最後の日々に、書物という同じ考えに取り憑かれていた。間もなく失語症がやって来た……」(強調引用者)(p.86)

ドーデーにとって「世界の終わり」は誇張とは限らない。『人生ノート』にも、同じ表現が使われている。

「私は世界の終わりを思う。論理的に、人間の法に則れば、それは世界の始まりに似るだろう。再び冷えてゆき、火が消え、もう燃やすものがない。大きな筏で生き延びた若干の人と動物が、手探りして洞窟で身を寄せ合っている。」(p.92)

ここで「世界の始まり」は漠然とノアの方舟を思わせる。そこにダーウィニズムに終末論を接ぎ木した退化という考えが、闘病記の「失語症」と対応する。「人と動物」が洞窟で対等に並ぶ時、言葉は伝達能力を失っているからである。闘病記に自身の失語症そのものの記述はないが、歩行困難になったドーデーには自分の表情も思うにまかせず、意識障害に驚くことさえあった。ある日、仕事部屋に本を届けに来た召使いの言葉が理解できず、彼に何を話したのか全く思い出せなくなった(p.77)。言葉を媒介とする他者および世界との繋がりが、痛みと運動障害、さらに表情筋と記憶の統制が効かなくなったことによって次第に断

ち切られてゆくと、ドーデーは同様に病に苦しんだ作家たちに、心の支えを求めた。文学的伝統に自分を連ねようとしたのである。こうして、ジュール・ド・ゴンクール、レオパルディ、寝たきりになったハインリヒ・ハイネ、さらには尿路結石を病んだジャン＝ジャック・ルソーの名を挙げて、「痛みにおける私の過去の分身たち（《mes sosies en douleur du passé》）」(p.87)の系譜が書かれると、闘病記はさながら文芸評論の走り書きになる。一方、写実主義的な療養所見聞記は氏名を伏した短評で(pp.82-84)、また後半の「痛みの国で」(pp.99-123)の全てを投じて試みられる。

このように、初期作品の共感力が痛みで後退すると、痛みの拓いた未知の経験に対する好奇心が、痛みそのものを乗り越える原動力になる。「痛みの国で」は、「黒い、黒い」と眩く盲人のように周囲が知覚されるので、「今や生はこの黒一色だ」。色覚が痛みで欠損し、さらに「私の痛みが地平線を掴み、全てを満たす」(p.109)。その結果、日誌風の闘病記の終わり近くで、報告文は祈願文に変容する。

「おお、私の苦痛よ。私にとって全てであれ。お前が私から奪う諸国を、私の目がお前の中に見出さんことを。私の哲学たれ、私の科学たれ。」(p.91)

このように、ドーデーは苦痛によって現実世界から居場所を奪われたが、災い転じて福となせと言わんばかりに、自分用にカスタマイズされた苦痛の哲学と科学の拓く新しい「国」で生きようと決意する。『ドゥールルー（痛み）』のほぼ末尾に記された次の引用に見るように、それはフィクションの国だった。

「もはや小説（le Roman）によって——つまり、他人の生によって——しか人生の内にはない有限の生（existence）。」(p.98)

この大文字の「小説」は、これまで私たちが読んできた闘病記とどのような関係にあるのだろうか¹³⁾。物語と実録の違いだろうか。まず、この「小説」は個々の小説作品ではなく、痛みの国に生きるドーデーが行う「生の記述」であり、彼が理想とするフィクションだと考えられる。

次に、記述の形態が問われよう。記述文は世界を指示するが、小説の言説は事実の提示を偽装するので、「現実」の指示対象を参照しない。つまり、小説は記述的言語を用いてフィクション言説を作り上げようとする¹⁴⁾。たしかに『ドゥールー（痛み）』は発話者本人を受容者とする閉じた言説（眩き）だが、この文章が作家の死後30年以上経って公刊されれば、本論筆者のように読者もこの文学的発話に没入できるようになる。さらに、構想された未完の「小説」にあっては、一定の伝記的事実を補うなら、ドーデーが他者化された自己の人生を生きているフィクション言説を、読者もまた「小説」として読めるだろう。読者の意識は小説の言葉を界面として、一方では作者ドーデーの痛みの現実と向き合い、他方ではフィクションに没入する。この現実対峙とフィクションへの没入は同時には起こり得ない。現実にとどまらざるをえない身体と心の一部分は傷ついているが、フィクションに仮構された人格は、その心身で病者を演じているからである。本気と偽装を同時に認識することはできない。ドーデーにとっても、異物化するみずからの身体に、共感力を働かせて心を合一させる離れ業を成し遂げるには、苦痛に満ちた世界が一個のフィクションに変貌しなくてはなるまい¹⁵⁾。

ドーデーは結局、このようなフィクション作品を書かずに没した¹⁶⁾。しかし、自己を壊れ物と認識してなお書き続けるところに、アルフォンス・ドーデーの凄みと個性がある。無力な人々に注がれる初期ドーデーの優しく哀しい眼差しもまた、この共感力に根づいている。

（本稿は、令和2-3年度成城大学特別研究助成「文化混交（ハイブリディティ）の観点から捉えた現代ヨーロッパ文学と美術に見る「世界の終わり」の総合的研究」の研究成果である）

注

- 1) ドーデーの人と作品については桜田佐訳『風車小屋だより（新版）』岩波書店、2021年、に本論筆者の寄せた解説と年譜（pp.281-295, 1-6）を参照されたい。
- 2) Alphonse Daudet, 《De mon moulin (première lettre) À Monsieur H. de Villemeessant》, *Œuvres*, I, texte établi, présenté et annoté par Roger Ripoll, Gallimard, pléiade, 1986, pp.396-399
- 3) *Notes sur la vie*, Charpentier, 1899, p.129 電子版（Universitätsbibliothek

- Paderborn) を参照した。以下、同書からの引用は本文に「(p.129)」と頁を記す。
- 4) 伝記は下記を参照した。Wanda Bannour, *Alphonse Daudet Bohème et bourgeois*, Perrin, 1990; Jacques Rouré, *Alphonse Daudet, biographie, Equinoxe*, 1994; Edouard Leduc, *Autour d'Alphonse Daudet*, Editions Complicités, 2017; Anne-Simone Dufief, Gabrielle Melison-Hirchwald, Roger Ripoll, *Dictionnaire Alphonse Daudet*, Honoré-Champion, 2019 バヌールは1861年の病を肺結核とする一方で年譜では病名を特定しない (Bannour, p.57, 218)。『アルフォンス・ドーデー辞典』(Gabrielle Melison-Hirchwald が作成) とプレイヤッド版の年譜 (Ripoll が作成) は「梅毒により健康を害し」とする。ルーレによれば、モルニー公の侍医で軍医あがりの Maréchal de Calvi が、南方での転地療養なくば生命に関わると診断したのは、帝妃周辺で梅毒の感染源となった貴婦人から引き離すためだった。Alphonse Daudet, *Œuvres*, I, p.XIX ; *Dictionnaire Alphonse Daudet*, p.12; Roulé, pp.69-71
 - 5) A. Daudet, *La Doulou, suivie des Carnets inédits*, Préface de Jean-Louis Curtis et Avant-propos d'André Ebner, Éditions Rencontre, Lausanne, 1966 同書からの引用は本文に「(p.129)」と頁を記す。フランス国立図書館の電子版 Gallica も参照した。これは挿絵入全集版 Librairie de France 発行、1931年法定納本。「ドゥルーレ」は註(3)の『人生ノート』に見えるようにプロヴァンス語で苦痛を意味する。「この《Gau de carriero, doulou d'oustau》(街路の喜び、家庭の苦痛) という我らが郷里の諺には見所がある。この俚諺を見出すとは南仏がいかに優れていたことか。」(p.63)
 - 6) Anne Carol, 《Débâcles corporelles: face à la maladie et la mort》in *Histoire des émotions*, dirigé par Alain Corbin, Jean-Jacques Courtine, Georges Vigarello, III, Seuil, 2017, p.296 なお同論文の拙訳は小倉孝誠監訳『感情の歴史 III』藤原書店、2021年、に収録。
 - 7) ルーレは普仏戦争を作風の転機とし、戦前に雑誌掲載され1872年2月に出版された『タラスコンのタルタラン』を「最後に陽に焼かれた本」とする。Roulé, p.164
 - 8) 末尾には二人の運動障害を病む療養者が、独身と家庭持ちのいずれが不幸かをめぐって対話する短い戯曲習作がある。Daudet, *op.cit.*, pp.121-123
 - 9) Bannour, *op.cit.*, p.151 アルフォンスの長男レオンの回想による。ドーデーは小説『福音宣教師』(1883)を「雄弁にして学識ある J.-M. シャルコー教授」に捧げている。ドーデーは入院患者を取材していた。Daudet, *Œuvres*, III, texte établi, présenté et annoté par Roger Ripoll, Gallimard, pléiade, 1994, p.231, p.1132
 - 10) 闘病記の書き手は創作ノートのような叙述を続ける。「この気圧計にあっ

ては、大気の影響が水銀柱の上昇以外のものを決定していると夢想してみずからを慰めている。多くの考えが私の脳にあふれ、人間に関する些細な法則を一つ、二つ発見した——秘めておくのがいい法則だが」(p.68)。この断章はジュリア夫人との共同作業を思わせる。当時のドーデーは小説『不滅の人』を執筆中で、自然と身体との相互作用についての考察を自分だけに「秘めて」おいたのだろう。

- 11) 桜田佐訳、前掲書 pp.270-271 普及版の編者コレット・ベッケールは、「〈居を構える〉を読んでいると読者は微笑からお伽話へ、〈見聞記〉から動物と人間たちを包み込む情動的共感へと移行する」と、新聞掲載時にはなかった冒頭の挿話が、フィクションへの導入になっていると示唆する。Colette Becker, préface aux *Lettres de mon moulin*, GF, 1972, p.27
- 12) ダーウィン『人及び動物の表情について』やウィリアム・ジェイムズの心理学書を解説する訳者らが一様に苦勞するのは「情動」「感情」「気分」など訳語の腑分けである。それぞれ英語で《emotion》《sentiment》《affect》ないし《feeling》が対応しそうな概念は、著者によって、また同一著者の著作の中でさえ必ずしも一貫して用いられないからである。加えて宗教的含意を持ち、英仏の心理主義小説で多用された「情念」「激情」を意味する《passion》が問題を複雑化する。ヤン・ブランバー『感情史の始まり』森田直子監訳、みすず書房、2020年；リサ・フェルドマン・バレット『情動はこうしてつくられる 脳の隠れた働きと構成主義的情動理論』高橋洋訳、紀伊国屋書店、2019年；ジェームズ／キャノン／ダマシオ『〈名著精選〉心の謎から心の科学へ 感情』梅田聡・小嶋祥三（監修）、岩波書店、2020年；ローゼンワイン／クリスティアーニ『感情史とは何か』伊東剛史、森田直子、小田原琳、館葉月訳、岩波書店、2021年、を参照。
- 13) 伝記作家は皆『ドゥールー（痛み）』を参照するが、その文学的価値についてはプロヴァンス地方出身の出版人、メディア制作者で、フランス国営放送の取締役を務めた（1975-1978）マルセル・ジュリアンが、ドーデーとプロヴァンス文学について行った講演で述べた直截な意見が参考になる。「公衆にとってドーデーの代表作は『ドゥールー（痛み）』ではない。これは悲しみと病気と不調を伝える一種の日記で、痛みについての証言なのだ」。Marcel Jullian, *Daudet et les lettres de Provence*, Éditions 1, 1998, p.29
- 14) ジャン＝マリー・シェフェール『フィクションとは何か』久保昭博訳、慶應義塾大学出版会、2019年、を参照。とりわけ第3章の5「フィクション的モデル化——フィクションと指示」で、シェフェールはサール、フレーゲを援用しながら文学的発話の特徴について、歴史小説やプルースト作品の魅力を説明できるフィクション論を提出している。
- 15) 変貌が苦痛によってであって薬物でないところが、依存状態を異郷として描いたボードレル、ミショー、コクトーからモルヒネ常用者ドーデー

を分かつ。

- 16) 『ドゥールー (痛み)』それ自体はドーデーの大文字で始まる小説ではなく、またこの闘病記に医事史に基づく研究は無いようだが、同様に梅毒を悪化させて譫妄に苦しみ、精神病院で死亡したモーパッサン (1850-1893) は、「ル・オルラ」「謎 (Qui c'est?)」など幻想怪奇小説を多く残し、療養地の医師らの証言に依拠する伝記もある。Marlo Johnston, *Guy de Maupassant*, Fayard, 2012 特 に Annexe B 《La syphilis et Maupassant》, pp.1119-1126